

はじめに

平成2（1990）年5月に本大学・短期大学の附属施設として開館した東京家政学院生活文化博物館は、創設30周年を超えて、新たな役割と可能性を探ることになりました。令和3年度の活動報告となる本号では、令和3（2021）年10月26日（火）～令和4（2022）年2月4日（金）に開催した第33回特別展『新たな出発点—東京家政学院生活文化博物館の30年—』の全貌を掲載しています。そのタイトルにあるように、文化・歴史的な資産の継承という役割に終わることなく、様々な地域のコミュニティーや企業・研究機関と連携してきた展示表現の成果を捉え直し、新たな活動の次元に進むことを展望した企画となりました。こうした働きかけの自覚は、「学内共催展」、「産官学共催展」、「移管資料展」の三部となった展示構成にも特徴づけられています。そして、資料選定の主たる枠組みとした過去の特別展が掲げた主題そのものが、積極的に社会に開いてきた志向を物語っている事実改め気づく機会になったことを示しているといえるでしょう。

さらに本号の「展示研究報告」では、新入生やオープンキャンパスに訪れる学生の鑑賞を意図した「東京家政学院の学び」展〔令和3年4月23日（金）から5月27日（金）〕や、「学生たちの贈り物」展〔令和3年6月7日（月）から7月30日（金）〕などの様子を報告しています。いずれも、創立者大江スミの建学の精神や授業に対する考え方、この学舎で学ぶ姿と喜びについて、教科書や作品などから感じてもらうことを期待したものといえます。

また、「学習成果報告」や「教員研究報告」では、現在本学で学ぶ学生の取組み、教員の方々の貴重な研究成果の展示について詳しく記録しております。特に、学生が主体的に学ぶ成果は、昨今地域連携や高大連携事業によって本学を訪れる機会が増えた学外の児童・生徒の目に触れる場を増やし、次世代を担う方々との対話から当館の新しい役割がより広く展望できることを願っております。

2023年3月

東京家政学院生活文化博物館館長
立 川 泰 史